

酒々井町

郷土研究会会報

第102号

平成13年10月1日
酒々井町郷土研究会
広報部

「墨の獅子舞」今昔

齋藤 甲一

毎年七月十五日は墨区の祭禮であり獅子舞が演舞されます。

獅子舞は、約二六〇余年前から伝承されているもので、その始まりは墨村鎮守六所神社の社殿を新築したときに出羽国(山形県)から師を招いて伝授された舞であるといわれています。昔(いつの時は不明)は春と秋に行われていたそうですが、今は六所神社と区長宅の二か所で五穀豊穡、子孫繁栄、家内安全等々を祈願して演じられています。演舞の種類目は足揃え、芝獅子、猿獅子、剣の舞等が伝承されており三匹獅子と道化の猿で構成され笛、小太鼓、大太鼓に合わせてそれぞれ舞うものです。それでは獅子のそれぞれの舞の中から代表的なところをいくつかご

紹介してみたいと思います。

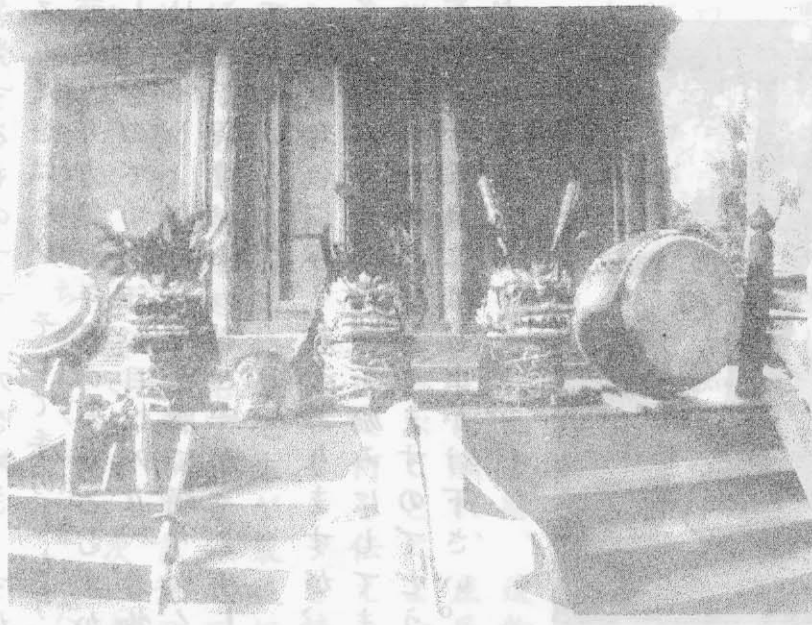
獅子三匹のうち角のない獅子は雌獅子と言いいわゆる女獅子を言います。角が板状になつている獅子は中獅子と言いい、太いねじつた角をつけている獅子は大獅子と言いい男獅子を言います。

女獅子は、女性らしく静かに静かに舞い五穀豊穡の願いの中で田植えをするところがあり苗を一本一本丁寧に植え付けます。

中獅子は、つるべ井戸から水を汲み上げるところがあり生活の水、田畑の作物に豊作を願って水をやるためだと言われています。また中獅子が剣の舞で剣を振るところは、村にしのびよる悪を切り裂くところださうでその悪をさがしている姿でむずかしい場面です。

男獅子は、大きな幣束を持って安全祈願のお払いをする舞がありました。全体的に大変男らしく激しい動きは一番体力を要する獅子です。

区の総会で区長代理に選ばれると(選挙)、翌年は区長職になるので一年前から獅子のことを考えるほど一大行事になってます。ときは過ぎし三十年ほど前に出羽国からの伝承と言われているいろいろ調査したところ羽黒山のふもとに獅子舞があるとのことと保存会で見学に行つたことがあります。舞は全く違つていたそうですが伝統のすばらしさには大変感動したそうです。



そして大変めずらしいところと言え、舞のなかに念仏の唄があることとです。

一チハヤフル、カミノトリキヲ

トオルトキハ

ユミモケガレモ、ツキウセニケ

リ (神社)

二十イタケヲ、ナナフシソロエテ

コレヲカミノ、イワイトスル

三ダイテラノ コウノケムリハ (神社)

ホソケレド

テンニアガリテ クロクモトナ

ル (寺)

四ナヌシサマハ、カフウミヨウガ

ナル ヒトナレバ、

マゴヒコソロエテ 百万石ノ

ゴシハイナサル (区長宅)

独特の曲で唄う場面がある。

六月に入ると夜遅くまで練習しい

ろいろいろな準備も始めます。昔と違っ

て勤め人が多い昨今、日程も調整し

ながら本番に向けて熱がだんだん入

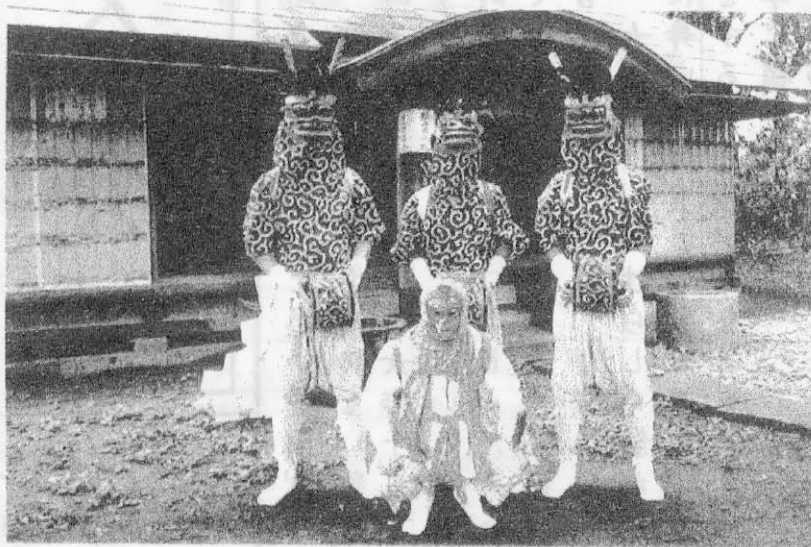
って行くところとです。寝不足の日が

続きます。

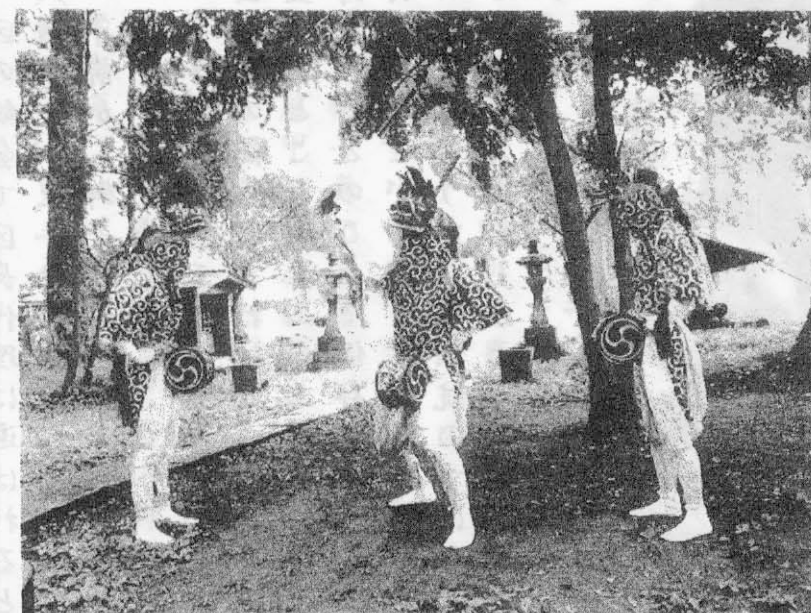
六所神社、区長宅への先導は、魔除

けの万燈ですが、万燈、大幣束等装

飾はすべて講員の手作りであり組み立てをしております。



大獅子(左) 雌獅子(中) 中獅子(右) 猿(前中)



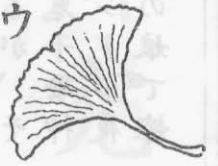
古い伝統をよく伝えていくという事で「舞」そのものを郷土芸能として昭和四十三年三月千葉県無形文化財に指定され保存会として組織し町はじめ関係者多数のご支援をいただきながら伝承につとめているところです。

苦勞するものです。力をぬき、すがるく足をはこび、そして手のしなり、頭のふり方等々年月のかかるむずかしいものです。汗が目に入り、着物はびっしよりぬれ、中腰で踊りぬくことと祭禮が終わると皆ガツクリしてしまいます。

後継者の悩みも若干ありますが、多くの方々のご声援を励みにしてまいりますのでどうぞ七月十五日にはお出かけ下さい。お待ちしております。

植物の話(9)

ムラサキシキブと
イチヨウ



亀井 香久乃

暑さも早過ぎ去り、辺りの草々が素枯れはじめると、里山が気になります。紫式部が呼んでいます。幸いにも酒々井は近くに野山があるので四季を通じて楽しめます。秋山を最初に彩るのは、紫式部の艶やかな実成りでしょう。花は地味ですが、果実は小粒ながら美しい紫色で人目を引きます。

紫色は、平安時代は一般では使えず、宮廷だとか三位以上の階層のみに許されてきました。

平安中期の女流文学者として有名な紫式部は、紫は源氏物語の紫の上から、式部は父(藤原為時)の官職名に由来するとされています。このような美しく雅な樹木名を付けられたこの木は幸せてすね。この他に藪紫式部、園芸種で濃紫式部、白紫式部等があります。

次に社寺の境内に植えられているイチヨウもこの季節には銀杏が実ります。

ます。落下した実を拾うのも楽しいものです。イチヨウは雌雄は別です。め木に実が付くのはかなりの年数を要します。イチヨウの花にはメシベ・オシベの他に精子を持つていることが、明治三十年、東京大学研究員で画工の平瀬作五郎氏により発見されました。当時の世界植物学会を驚かしたそうです。め花は四月末頃受精し八月頃精子を受精し、完全に結実したものが銀杏です。精子発見のイチヨウは記念樹として都内小石川植物園に大切に保護されています。以上は恩師の話と文献によるものです。私も確認したいのですが高木に咲くので実行は無理です。以上の事実を知らば、イチヨウは他に類を見ない高等植物となります。

「木下街道」の講演を

聴いて

丸山正義

今年の郷土研の新企画として始まった『木下街道を歩く』榎本先生の二回目の講演会は八月十九日午後、公民館視聴覚室一杯の聴衆で熱氣溢れるものとなりました。

今回はポイントをしぼって、街道筋の八幡宿、鎌ヶ谷宿、白井宿、大森宿に残る寺院、石塔、史跡等を通じ、先生が現地で収集した諸資料に基づき研究成果を交えてのお話でした。

なかでも、『南無阿弥陀佛』の番号塔を巡る字体の謎解きに胸をときめかせ、また印西の泉王寺に残る資料から、酒々井がその信仰園にあったこと、木下街道と酒々井との不思議な縁を知りました。

ユーモア溢れる先生の独特な語り口によって、知らず知らずのうちに郷土史の世界に誘われ知的好奇心を大いに満たされた一刻でした。

かつて、人や物、情報が往き来した古道を辿り、残された史跡、遺物を通じてその時代の文化に触れ、庶民信仰を学び、生活を偲ぶことによつて、彼等が後世の私達に何を伝えようとしたのか、そのメッセージを読み解く楽しみ、それが先生が最後に言われた『郷土史研究は自分の足で歩いて勉強しなさい』とのお言葉の実践ではないかと強く感じ、次の木下街道歩きが待ち遠しくなりました。



境内鬼子母神像

「鬼子母神」に魅せられて

岡田利光

前日までの雨も、からりと上がつた九月五日、京成駅に心を弾ませながら三八名が集合し、町屋乗換え、カラフルなのちよつとのんびりした一両の都電で面影橋下車、早速太田道灌の山吹の里碑を見て有名な句を口ずさみながら江戸三不動の一つ目白不動尊・金乗院に到着した。元禄年間には綱吉將軍および母桂昌院の篤い帰依を受け『境内眺望勝れたり、雪景もつともよし』といわれた境内に、不動明王の法形・龍が刻んである坂東随一の俱利迦羅不動庚申塔及び『慶安太平記』の丸橋忠弥と青柳文蔵の墓があり、それぞれ心に刻みつつ全員気分よく歩いて歴史が語りかけてくれる佇まいの雑司が谷界隈に入り、威光山法明寺と近くの雑司が谷鬼子母神に詣つた。現在は

子授け子育ての神様として、広く信仰されているが、その昔鬼子母神はインドの夜叉神の娘で嫁

いてより多くの子を産んだがその性質が暴虐で近隣の子供を食べるなど人々から恐れられたため、お釈迦さまが末子を隠してしまつた。それで彼女は今までの過ちを悟りお釈迦さまに帰依しその後、安産子育ての神となつたという話を聞き深く感銘致しました。シンボルマークがざくろの実というのも珍しい。名勝を探つた後、最先端ファッションの街、池袋の高さ二四〇メートル、六〇階のサンシャインピルの庭で現地解散になりました。楽しい一日でした。

郷土研日誌

月日	内容	人数	月日	内容	人数
6/28	印刷	5	8/24	研修部会	13
6/30	発送	21	8/29	日帰り見学会	27
7/7	日帰り受付	3	8/30	名勝下見	4
7/7	史談会	22	8/31	運営委員会	25
7/17	古文書学習	6	9/1	史談会	17
8/9	日帰り下見	3	9/5	名勝探訪	38
8/16	日帰り下見	2	9/14	木下街道を歩く	35
8/19	編集会議	7	9/18	古文書学習	5
8/19	郷土史講座	65	9/18	編集会議	6
8/21	古文書学習	6	9/19	文化祭実行委	13

小見川方面 会計報告

収入	800 × 27 = 21600 円
支出	拝観料等 9000 円 コピー代 1200 円 飲み物 2100 円 12300 円
残(会計へ)	9300 円

あとがき

不思議な縁で酒々井に移り住み、二十数年たちました。古きよき時代の様々な話を聞き、また多くの名所・旧跡の見学会に参加し、様々な地域の歴史の勉強をさせて頂きました。さて酒々井町再発見ということ最近町の獅子舞がクローズアップされていきます。そこで今号では墨ご出で、獅子舞の表裏を知り尽くされてる齋藤甲一さんに解説を入れて書いていただきました。獅子が舞つてる様子が目の前に浮かぶようですね。来年の墨・馬橋・上岩橋の獅子舞に足を運ばれてみてはいかががてしよるか。